2015GW・東北山スキーの旅

2015.5.20　広島県・西部伸也

　今年の3月、大西さんの『かわらばん』でも紹介された、「インターハイの山でのバックカントリー」と絡めた『滋賀県山スキー旅の思い出』を、全国の関係の先生たちにメールで送ったところ、2011青森大会の総監督隊長であった俵谷先生から懐かしい返信をいただいた。その返信の中に、3年前3月の青森訪問の際には行くことのできなかった南八甲田山や岩木山での山スキーのお誘いもあり、再び心がうずうずしてきた。そうして3月下旬頃、密かに決心をした。

　ただ、3年前の時のように一人で行くとなると、行き帰りの車の運転は体力的にも金銭的にも大変である。そこで、広島県内はもとより、中・四国、さらには中部地方の何人かの知り合いたちに呼びかけてみた（計10人ほど）。けれども、GWの五連休を丸々山に費やせる人はそんなにはいないようで、結局メンバーは私と岡山県・田中初四郎先生の二人のみとなった。（二人とも定年を過ぎた再任用の身、そして家庭からはなかば見放されている（？）という好条件に恵まれているからかもしれない。）

　5月1日金曜日、定時に勤務を終え、自宅に戻って着替えをし、17時40分に広島市南区の自宅を出発。岡山県浅口市の田中先生宅に19時20分到着。田中先生の車に荷物を積みかえて、19時半過ぎに出発。２時間毎くらいに運転を交替しながら、山陽道から舞鶴若狭道・北陸道へと順調に車を走らせる。田中先生の車はマニュアル車で、私にとっては20年振りの手動ギアチェンジ。クラッチの加減にやや不慣れで、ギクシャクした発進になることもあったが、マニュアル車の運転もなかなか面白い。もっとも、高速走行中は6速のトップギアに入れっぱなしで、あまりギアチェンジをすることもなかったのだが、もうひとつ、エンジンがクリーンディーゼルであるというのも良かった。最近はマツダのCX-5などが評判だが、田中先生の日産Xトレイルもなかなかよく走る。

　新潟まで走ったところで、どちらを通るか一思案。磐越道・東北道とつないでずっと高速で行くか、それとも何区間か一般道を通ることにはなるが距離の短い山形・秋田の日本海沿いで行くか。早朝の通行量の少ない時間帯ということもあって、後者に決定。後で青森・岩木山麓に着いたとき、これが正解だったことを知る。というのも、岩木山麓岳温泉にて、これから春スキーバスに乗るという福島からの男女二人連れと一緒になったが、その人たちの情報によれば、5月2日朝、東北道下り仙台付近で8台の玉突き事故があり、東北道が通行止めになったとのことだった。（福島の方たちはその直前に通過したとのこと。）なお、福島の方からは、最近月山に山スキーに出かけた人たちが、板の裏が油まみれになってまったくスキーが滑らず閉口していたという気になる情報も得ていたのだったが…。

　田中先生宅を出発して15時間半後の5月2日午前11時、岩木山麓に無事到着。（一人での運転だとどうしても途中で止まって休むことになり、早くても到着は夕方になるのだが。）大鰐弘前ICを降りて岩木山が近づくにつれ、独立峰の白い姿に心が浮き立つ。ところがさらに近づいて山の様子がもっとわかるようになると、意外と雪が少ないのに気付く。百沢のスキー場ゲレンデにはすでに雪はなく、雪が残っているのはその上部のみだ。さらに南西側の岩木山スカイライン入口付近から眺めると、尾根筋にはあまり雪はなく、細い沢筋が白く見える程度だ。果たして雪は麓までつながっているのだろうか？少々心配になり、この日の夕方、百沢の桜林公園で合流することになっており、この日は佐々木さん（青森大会総監督隊副隊長）と長平コースを滑っているはずの俵谷先生に連絡を入れてみた。俵谷先生が、「岳コースはまず大丈夫でしょう」と言うので、ともあれ岩木山八合目に上がる春スキーバスに乗る準備を始めた。

　青森大会の総監督隊宿舎であった『山のホテル』のすぐ下のバス停からの春スキーバスのダイヤは11:25の次は13:25であったので、ゆっくり昼食をとりながら支度をする。岳温泉のバス出発は13:30となったが、八合目には30分もかからない13:55に到着。やはり雪は少ない。山頂部にはまったく雪は付いておらず、やや下の斜面にある程度の雪が残っているばかりだ。ともあれ、岳コースのドロップポイントとなるリフト乗り場のすぐ脇（1250ｍ）に移動し、滑降の準備をする。岳コース上部の積雪量は特に問題はなく、ブナ林が切り開かれた感じの斜面を順調に高度を下げていく。すこぶる気持がよいというほどではないにしても、特別滑りにくい雪でもなく、まずまず楽しく滑る。やがて落葉のブナ林が新緑の芽吹く林に代わり、傾斜も緩くなって、滑降の醍醐味は薄れてくるが、雪の続く斜面をなおも下っていく。切り開きは判然としなくなり、標識とピンクテープの目印を頼りに進んでいくと、俵谷先生の言葉通り、最後ほんの少し土の上を歩きはしたものの、岳温泉のすぐ上の稲荷大明神の小さな社（460ｍ）までなんとか雪はつながっていた。（30分弱で滑降終了。）

　久し振りの山のホテルのヒバの風呂で汗を流した後、俵谷先生と佐々木さんがテントを張って待つ桜林公園へ。この日の晩は、青森名物のホタテなどのバーベキューをごちそうになる。青森のお酒『田酒（でんしゅ）』の一升瓶、さらに広島から持参した『本州一』の四合瓶や飲みかけの『比婆美人』が二合ばかりあったが、朝目覚めてみると、それがきれいに空っぽになっていた。私自身は運転の疲れもあり、皆さんよりは早めにシュラフにもぐらせてもらったため、そんなにたくさん飲んだ記憶はないのだが…。

　翌3日は6時半過ぎに桜林公園を出発し、八甲田山へと向かった。南八甲田の駒ヶ峰・櫛ヶ峰・横岳を縦走すべく、城ヶ倉大橋の黒石側駐車場に佐々木さんの車をデポし、駒ヶ峰への取り付き点となる睡蓮沼へと向かった。懐かしい酸ヶ湯温泉の前を通過して、8時15分に睡蓮沼に到着すると、路側の駐車スペースはほぼ満杯状態となっていたが、なんとか2台分の駐車スペースを見つけ、登山支度に取りかかる。

　睡蓮沼の標高は990ｍ。今年は雪解けが早く少なめの積雪量とは言え、ここ八甲田は昨日の岩木山と比べると雪は多く、あたり一面どこでもスキーで行き来できる。高田大岳や小岳・大岳などの北八甲田の峰々を背後に徐々に高度を稼ぎ、やや斜度のある斜面を過ぎて1200ｍ過ぎの台地上の緩斜面で一休憩入れたのち、1280ｍの通称「ニセ駒」に10時に到着（睡蓮沼を出発して1時間20分）。小休憩ののち、1416ｍの駒ヶ峰には30分弱で到着。少し長めの小休憩ののち、本日のコース中の最高点である櫛ヶ峰（1516ｍ）を目指す。間には1310ｍの鞍部もあるため、私はいったんシールをはずしてみたが、下りとはいえ傾斜は緩くてあまりスキーは滑らず（理由は傾斜の緩さだけではなかったようだが…）、結局はシールの脱着の時間だけ余計にかかってしまった。櫛ヶ峰には駒ヶ峰出発からほぼ1時間後の11時45分前後に到着。絶好の日和に恵まれたGWの中日、俵谷先生と佐々木さんが「南八甲田でこんなにもの人出にお目にかかったことはない」と言うほど櫛ヶ峰山頂は多くの山スキーヤーで賑わっていた。四方の景色を堪能しながら昼食休憩に50分を費やす。

　さて、ここからは、横岳（1350ｍ）への100ｍ少々の登りがあるとはいえ、720ｍの城ヶ倉大橋まではほぼ下りだ。単純な標高差で800ｍ、滑降距離は6km少々。心がはやらないわけはない。まずは櫛ヶ峰山頂東側の斜度のある大斜面を滑降、なかなか気持ちが良い。標高差50ｍばかり滑降したのち、北方向にトラバースして横岳へと続く稜線上に出る。そこからは少しばかりの中斜面とあとは横岳手前の鞍部まで緩斜面の下りなのだが、どうもスキーの滑りが妙だ！？櫛ヶ峰山頂で塗ったワックスが雪質に合っていなかったのかと一時思ったのだが、どうもそうではないようだ。皆さんも一向にスキーが滑らないとぼやいている。スキーを脱いで板の裏を指でなぞってみると、黒い油状のものが指にべっとりと付いた。昨日、岳温泉で福島の方から聞いた月山での妙な情報はこれだったんだ！月山の件はブナの新芽から落ちる油のためと聞かされていたが、ここ南八甲田の櫛ヶ峰から横岳へかけての稜線にブナの林はない。いったいこの油は何だろう？ともあれ横岳に向けては再び登りになるのでシールをまたつけて歩きだす。（本来ならまだしばらくはほぼ水平のコースなのでノンシールでも行けるはずなのだが…。）なお私は、スキー靴が少々きつかったのだろう、ゆるい下りや水平のコースではつま先が痛み出して思うようにスピードが上がらず、皆さんには後れを取ってしまった。横岳への登りで挽回し、櫛ヶ峰を出発して1時間半近くたった14時ちょうどに横岳到着。

あとはもう登りはない。けれども緩斜面の下り。やはりスキーが滑らない。俵谷先生はシールをはがすと板裏に糊が残って具合が悪いとのことでシールを装着したまま滑降していったが、むしろそちらのほうが速いという始末だ。標高1100ｍあたりまでは非常に緩斜面なので、樹林の中のコース取りによっては少しばかり登り返す場面も出てくるのだが、シール未装着にもかかわらず簡単に登れてしまうという有様だ。つま先の痛みも増してきて、私にとっては苦行になりつつあったこの日のスキーツアーであったが、標高1100ｍを過ぎて傾斜も幾分強まり、スキーがぼちぼち滑り始めてきた。（そしてこの辺りがむしろブナ林であった。）城ヶ倉大橋の車道に降りる直前の標高750ｍあたりまでなんとか滑降。あとは雪もいったん途切れたのでスキーを脱ぎ、スキーを担いでつぼ足で車道に降り立つ。横岳を出発して1時間かかって城ヶ倉大橋駐車場に到着した。横岳からは標高差650ｍ、距離3km。雪質と積雪量に問題がなければ、おそらく30分とはかからないだろう。ちなみに30分弱で滑った昨日の岩木山・岳コースは、標高差780ｍ、距離4km弱であった。この日の夕方の幕営地であった田代平箒場で、田中先生は地元のスキーツアーガイドの人と話す機会があったようだが、地元ガイドの方の情報によれば、この日はどのツアーコースでも通常よりは1時間余計に時間がかかっていたということだった。

城ヶ倉大橋駐車場で4人全員が佐々木さんのアウトランダーPHEVに乗り込み、今朝の出発点の睡蓮沼へ。当初この日は酸ヶ湯の駐車場で幕営予定であったが、あまりの人の多さに八甲田山東側の田代平箒場に幕営地を変更。（途中、酸ヶ湯温泉で下車し、売店で食料を少々買い出し。）青森県登山専門部が大会でいつも使うというこの場所、GWにもかかわらずあまり人はおらず、静かで心地よい。すぐ前のレストハウスのオーナーさんとは俵谷先生が懇意で、水道・トイレの便宜も図ってもらう。15時30分に城ヶ倉を出発し、箒場への到着が16時過ぎとなっていたため、17時までの八甲田温泉（箒場から青森方面に4kmほど行ったところにあり、最近リニューアルされた広々としたお風呂である）に入るべく、テント設営は後回しにして、再び車に乗り込む。広々とした露天風呂から北八甲田山の美しい景色を眺めながら、この日の、すばらしい天候と景色に恵まれながらも、滑らない雪で少々くたびれた体をほぐして一心地つき、箒場に戻ってレストハウス裏のブナ林の中にテントを設営。そしてこの日の晩もホタテ等のバーベキュー、さらには小さなタケノコの炒めものもごちそうになった。佐々木さんは山菜・キノコ・タケノコ採りの名人のようだ。この日の飲み物は『豊杯（ほうはい）』の一升瓶、その他には日本酒でつけた梅酒や中国の紹興酒も持参していたが、やはり翌朝には空瓶になっていたようだ。（恐るべし…。）

　翌4日、GW前の週間天気予報では悪天が予想されていたのだが、幸運なことに昼過ぎまでは天気が持ち、しかも午前中は晴れもするということだ。この日のコースは、谷内（やち）温泉（790ｍ）から高田大岳（1552ｍ。ただし雪渓トップは1500ｍくらい）の往復だ。北八甲田山に属する高田大岳ではあるが、谷地温泉からのルートは、4月になって酸ヶ湯からの道路が除雪されなければ入ることはできない。朝6時半前に箒場を出発し、10分少々で谷内温泉に到着。昨日の睡蓮沼ほどではないが、何台か車が止まっている。（なお、温泉は改修中で、今は入浴できない。）

　登山支度を整え、ちょうど7時に谷内温泉の駐車場を出発。俵谷先生と佐々木さんが今回のために下見をしてくれた1週間前には、スキーを担ぐことはなくてすぐにシール登高を始め、下りもすぐ脇まで滑って降りられたとのことだが、この1週間で雪解けがだいぶ進んだようだ。少しばかり階段道になっている登山口からの登山道を数分スキーを担いで登る。標高差にして10ｍほども登るといったん平坦な林となり、ここからは一応シール登高で行けそうだ。しばらく進んで再び登りが始まるところの湿地で水芭蕉の可憐な姿が私たちを出迎えてくれた。以後、まずは緩やかなブナ林の斜面を登っていく。40分ほどで974ピーク（通称「1000ｍ台地」）に到着し小休止。林の合間からは高田大岳の山頂と本日の目的地となる山頂直下から広がる三角形の雪渓が覗いている。1000ｍ台地から少しの下りがあるため、前日のおかしな雪でシールが板に接着しなくなった田中先生はいったんシールを外して先行する。鞍部で再びシールを装着する田中先生を追い越し、次第に傾斜を増す斜面を登っていく。1000ｍ台地を出発して40分、標高1150ｍあたりになると斜度はなかなか急で、シールのみでは不安だったので、スキーアイゼンも装着した。1000ｍ台地を出発して約1時間、1200ｍを過ぎたあたりで2回目の小休止。田中先生はシールがやはり不調で、ジグザグ登高が必要になる急斜面ではシールが板から外れてしまうということで、このあたりで登高を断念、残る3人で雪渓トップを目指す。先ほどの休憩地点から約45分、9時45分に1500ｍ過ぎの雪渓トップに到着。私は笹の藪を漕いで高田大岳のピークに立つことも考えて運動靴も持参していたが、どうも時間がかかりそうなのでそれは断念した。

10時過ぎ滑降開始。斜度もあり、昨日のように下りなのに滑らないということはまったくなく、快適な滑降であった。田中先生が待つ1250ｍあたりの大きなダケカンバがあるところまではほんの3分で滑り降りた。3人は昼食がまだであったため、ここで30分少々大休止。眼下に広がるブナの新緑の森が美しく、その中にこんもりと盛り上がっている黒森岳（1023ｍ）が目を引く。再び滑走を開始。1000m台地の登り返しを避けてトラバースしながら、30分少々で谷地温泉に帰着。

11時半過ぎに谷地温泉を出発し、猿倉温泉で汗を流すことにする。この温泉もまた4月にならなければ行けないところだ。昨日の八甲田温泉のように広々とはしてないが、ここの露天風呂も、遠くに高田大岳、すぐ目の前には猿倉沢の河原が広がり、気持ち良い。

お風呂からあがって12時30分、5月2日夕方桜林公園、3日南八甲田山、そして4日午前高田大岳と3日間共に過ごし、残雪の青森の山を堪能させていただいた俵谷先生と佐々木さんに別れを告げ、翌日の目的地とした秋田・山形県境、鳥海山の山麓へと向かうべく車に乗り込む。再び酸ヶ湯温泉前を通過して、黒石ICまでは40分少々で着いたが、お土産を買うべく、その数分先の道の駅「いなかだて」に立ち寄る。りんごジュースやホタテのせんべいなどを買い求め、14時過ぎに黒石ICに入る。以後、来た時と同じ経路で鳥海山麓に向かい、秋田県南端・にかほ市の金浦ICを出たのが17時20分頃であった。一般道に降りるとやや渋滞もあり、食堂で夕食を取ろうと考えた山形県・酒田市の街中に到着したのが18時30分頃となった。いろいろな店が立ち並ぶ繁華街の食堂は人がいっぱいで、繁華街を少し外れた住宅街の焼肉店にて夕食。少しお金はかかったが、美味であった。

秋田県方面に少し後戻りして、道の駅「鳥海ふらっと」の駐車場脇にてテントを設営。この日は天気予報通り、青森から移動中であった午後3時くらいから雨が降り出し、時折は激しい雨脚になることもあったのだが、「雨男」田中先生がいるにもかかわらず、我々はよほど幸運の女神に見守られているのか、ちょうどテントを設営しようとした20時頃には雨脚がぴたりと弱まったのである。夜半、テントの屋根を雨がたたく音が聞こえていたが、それも未明には止み、翌朝は再びからりとした晴天になっていた。

鳥海山五合目に通じる「鳥海ブルーライン」の交通規制（17:00～8:00の夜間通行止め）についてよく知らなかったため、5時15分に道の駅を出発したのだが、三合目の「駒止」で2時間半ばかり足止めを食うこととなった。我々は先頭から2台目の車であったが、その間我々の後ろには十数台の車が並んだ。8時少し前にゲートが開くと、一目散に五合目を目指して駆け上がる。鳥海ブルーラインの最高地点であり、秋田県側の登山口となる鉾立（1160ｍ）までいったん上がってみるが、尾根筋の雪の付き具合はあまりよくないようなので、1.5kmほど後戻りして雪渓の末端から取り付くことにする。（このあたり、道路脇がかなり広がっていて、10数台ほどの駐車スペースがある。田中先生は以前やはりGWに長野・松田大先生たちと鳥海山に登ったことがあり、そのときもここが取り付き点だったとのことである。）

鳥海山の裾野とも言えるこのあたり、傾斜はかなり緩く、順調に高度を稼いでいく。標高1070ｍの雪渓末端を出発したのが8時30分で、1時間20分後には早くも雪渓のトップ地点である1640ｍ地点に到達した。山頂（2236ｍ）に至るにはさらに長い行程があり、この日は夕方に仙台の伊藤さん（宮城県前委員長）宅を訪ねることにしていたので、御浜小屋（1700ｍ）あたりで引き返すつもりでいたのだが、雪解けの早い今年はその手前で雪が途切れていた。ともあれ雪渓トップでスキーを脱ぎ、徒歩ですぐそばの稜線に移動し、さらにすぐ上のピーク（『岩峰』）に立って四囲の素晴らしい景観に見とれながら後続の田中先生を待っていると、稜線の反対側（岩峰の南側）からも何人かのスキーヤーが登ってきた。「ふーん、こちらからも登って来れるんだ」と思っていると、なんとそこに田中先生もいた。「田中さーん！」と声をかけると、岩峰の南西側を巻けば雪渓がずっとつながっているとのことだった。（私は登山ルートの目印である赤旗からあまり離れないよう、岩峰の北西側になる雪渓を辿ってきたのだったが。）

ともあれ田中先生と合流し、どこまで登るか相談した。山頂のある東方面、御浜小屋付近を目指してもよいが、帰りには若干の登り返しがあるようだったので、岩峰のすぐ南西側になる『三峰』ピーク（1660ｍ）を目指すことにした。岩峰のすぐ下から10分少々で三峰のピークに立ち、しばし休憩。エメリーの古い金具をつけた地元・山形の山スキーヤーと一緒になり、しばし歓談。その人が、「このあと仙台に行くのだったら、途中で月山に寄るのもいいのではないか。リフトもあるし」と言うので、田中先生がすぐにその計画に乗る。

私も道路地図を見ながら月山が仙台に行く途中になるとは思っていたが、時間のこともあり、まさか立ち寄ることになるとは思っていなかった。月山には2011年8月、車で青森大会に行く途中に立ち寄り、山頂を踏んでいた。そしてそのときには、あまりの雪の多さに4月になってスキー場がオープンするという月山でぜひとも夏スキーをやってみたいと思い、8月にもかかわらずスキーを担ぎあげ、ほんの申し訳程度に残っている『牛首』付近の雪渓で一応スキー滑走をしたのではあるが、雪質もガチガチで、到底満足のいく滑走ではなかった。したがって、田中先生が月山にも立ち寄ろうと言い出した時には、内心喜んだ。

元々せっかちな田中先生は、月山にも立ち寄ると決めたら、山頂での景色を十分に堪能することもせず、そそくさと滑り降りてしまった。慌てて私もそのあとを追いかける。程よい中斜面と緩斜面の続くこのコース、眼下の日本海を見下ろしながらゆったりと滑り降りることができ、実に爽快だ。あとから登ってくるスキーヤー・ボーダーたちに手を振りながら、楽しいひと時を過ごす。そうして滑り始めて15分もたたないうちに雪渓末端の取り付き点に帰着。11時少し前であった。

月山にも立ち寄るため、すぐに車に荷物を積み込み、11時5分に出発。国道7号線に降りて道路脇の食堂で「とびうおラーメン」を昼食に食べる。味も良かったが、麺の量がなかなか多いのにも満足。酒田みなとICで高速に乗り、13時25分に月山姥沢駐車場に到着。すぐに登山支度を整え、リフト乗り場を目指すが、駐車場からリフト乗り場までの歩きがなかなか辛い。ともかくもリフトに乗り、さらに高みを目指すが、ゲレンデのＴバーリフトで登ったのではバックカントリー失格。そこで、月山山頂（1980ｍ）は遠くもあり雪も付いていないため、その手前となる一番取り付きやすそうな『金姥』のピーク（1680m）に目標を定める。リフト上（1510ｍ）からシール登高で30分少々で到着。360度の大展望はなかなか気持が良い。さて、下りの滑り具合がどうだろうかと少々気にもなっていたが、鳥海山同様、特に問題なく、快適に滑り降りることができた。ゲレンデとは反対側のリフト尾根の東側をトラバースしながら降り、やがてリフト乗り場の見える急斜面の上に出る。緩んだ雪に少しの油がやはりあったのか、あまりスピードの乗らない滑降ではあったが、特別な問題はなく、リフト乗り場建物の下まで滑り降りる。そこからは雪伝いに駐車場まで行くことができたが、傾斜はあまりなく、少々アルバイト。ともあれ駐車場に帰り着いて（金姥ピークから20分）、2015年GW4日間の山スキーに大満足し、仙台の伊藤さん宅を目指すことになった。

まずはスキー場の少し下にある志津温泉の展望浴場で汗を流し、16時20分に出発、月山ICから山形道に入って仙台に向かっていた。すると、長野・大西さんから電話が入り、「明日6日は空いているので、合流できないか」とお誘いを受けた。移動中であったので、またあとで連絡することにし、東北道の泉スマートICを17時50分に出て、大西さんに連絡を入れた。仙台に立ち寄ったあと、最終日5月6日は午前中に新潟県糸魚川市の非圧雪ゲレンデで有名なシャルマン火打スキー場に立ち寄る計画も広島・岡山出発前には立てていたが、雪解けが意外と早くて雪が少なめだったこと、また4日間で十分満足したこともあって、その計画は取り消して、6日朝には岡山まで帰ることにしていた。田中先生は、不調になったシールを新調すべく、スキー道具を大西さんに預けて松本の『ブンリン』に持って行ってもらうことも考えたが、松本に立ち寄るとなると、中央道・名神での渋滞が予想されたため、せっかくのお誘いではあったが、今回は見送ることとした。

泉ICを出たあと、20分ばかり走って、目印となる伊藤さん宅近くの生協に到着。伊藤さんに車に乗ってもらい、伊藤さん宅に着くと、宮城県前々委員長の大久保先生も、お近くにお住まいということで来られていた。伊藤さんにおいしいお茶を入れてもらい、青森・山形で写した山の写真を、最初はパソコン画面で覗いていたが、伊藤さん宅に大きなスクリーンというすばらしい機器があり、パソコンをそれに接続して、大画面で写真を見せてもらった。写真を見ながら2時間ばかり歓談し、木の温もり溢れるご自宅と、部屋のあちこちに飾られた伊藤さんの手になる大小の油絵等も鑑賞させてもらい、20時30分、伊藤さんと大久保先生においとまを告げてご自宅を後にした。別れ際には、俵谷先生と佐々木さんにも声をかけさせてもらっていたように、来年8月、岡山インターハイ閉会式の日の晩に、全国の山仲間に蒜山につどってもらおうという田中先生の計画をお伝えした。

給油をしたのち、仙台宮城ICから東北道・磐越道経由で北陸道に入り、あとは来た時と同じ経路で帰っていった。どちらかといえば床に就くのが早めの私は、真夜中の運転は少々眠たくなり、早めに田中先生に運転を交替してもらったが、田中先生はなかなか元気で、3時間ぶっ通しで運転することもあった。翌6日朝7時40分、山陽道の三木SAのフードコートで朝食。8時10分に出発して、玉島ICを9時30分に出、最後の給油をして、田中先生宅に到着したのが、仙台・伊藤さん宅を出発して13時間20分後の9時50分であった。田中先生宅で軽油代・高速代等を計算してもらい、1人32,600円の支出となった。もし仮に1人で行ったとすればその倍になるのであるから大助かりである。田中先生に別れを告げ、広島県東部の福山で暮らしている母親のところに立ち寄って一緒に昼食。しばらくくつろいで、広島の自宅に戻ったのが夕方であった。

例年になく早い雪解けで、また特に南八甲田では滑らない奇妙な雪にも巡り合ったが、中国地方ではほぼ不可能なGWのこの時期に山スキーが存分に楽しめ、大変幸せであった。これで今シーズン通算38日のバックカントリースキーとなった。昨シーズンの41日には及ばないことになりそうだが、今月あと1日くらいは追加して、今シーズンの滑り収めにしたいと考えている。さて、どこがいいだろうか。広島からあまり遠くなくて、雪がたくさん残っていそうなところとなると、白山、立山、そして富士山か。ちょうど日本三名山だ。白山は十数年前、別当出合からは往復したことがある。昨年は自転車も使い、飛騨側の大白川から『東面台地』に取り付いてみたが、標高の低いところでは藪こぎも余儀なくされ、2200ｍあたりで断念している。エメラルドグリーンの白水湖と周りの林がとても美しくて印象に残っており、再び訪れてみたい気持ちはあるが、大白川への道路は6月にならないと通行止めが解除にならないようだ。立山は雪は多いだろうが、乗り物でいろいろとお金もかかる。そうすると富士山か。夏も含めてまだトレースしたことがない須走ルートで往復してみようか。昨年はやや早めの5月11日に吉田側からトライしたが、7合目から上はアイスバーン、8合目からは強風も吹き始めるという厳しい条件で、両手にはブレード付きのストックを握ってはいたものの、アイゼンが4本爪の軽アイゼンであったため9合目で断念した。（スキー滑降は7合目まではほぼ横滑りであまり楽しみはなかったが、その後北方向に大きくトラバースして吉田口五合目が眼下に見える斜面に出ると、頃よいザラメ雪で、実に快適な滑降が楽しめた。雪もとても多く、観光客で賑わう展望台のすぐそばまでスキーで滑り降りることができた。）昨年より20日ばかり遅い時期となるだろうが、頂上を目指すとなると、こんどは通常のアイゼンも持参したほうがいいだろう。須走ルートの滑降はどうなるだろうか？上部は吉田大沢をまっすぐ降り、その後右寄りにルートを取れば良いだろうか？往復コースなので、天候さえ悪くなければ、ルート判断に迷うことはないだろう。今年は残雪が少なく、もしかしたら7合目あたりまで土が出ているかもしれないが、それでも構わない。須走ルートにトライするというだけでも楽しみだし、ましてバックカントリースキーが楽しめれば言うことはない。山旅の計画がまた楽しくなってきた。